

人文会 ニュース

業務用

〈特集〉販売面からの装幀感

一書店の立場からみた人文書
における装幀とは何か

三省堂書店神田店 川野辺明

販売現場よりみた装幀 U氏へ

信山社 小用茂夫

同時代としての装幀

新宿紀伊國屋書店 斎藤 進

装幀雑感

装幀家 司 修

装幀嫌いの弁

勁草書房 富岡 勝

東京堂書店建て替え
オープンにあたって

東京堂書店
常務取締役 澄田 譲

〈人文書講座1〉

記号論とは何だろうか

紀伊國屋書店出版部 渦岡謙一

人文会各社売行良好ベスト5(6～8月)
会員社各名簿

'82.10 36

丸山 真男 著

〈最新刊〉A5判カバ―・一六〇頁・定価二〇〇円

後衛の位置から

『現代政治の思想と行動』追補

本書には、英語版「現代政治の思想と行動」著者序文邦訳、「憲法第九条をめぐる若干の考察」及び「近代日本の知識人」の三篇を収録。附録として、英語版に寄せられた書評五篇を「西欧と日本の対話」（松沢弘陽訳・解説）として収める。『現代政治の思想と行動』以後の著者の戦後日本政治に関する発言である。

東京文京区小石川三の七
振替 東京 七・八七三八五
電話 814・5521

未来社

権威者の書き下ろし通史。考古学事典の役目も果たす好著。

日本考古学概論

斎藤 忠著

A5判・図版多数
本文、四七八頁
定価三、八〇〇円

複雑多岐な日本考古学を、先土器時代から近世に至るまで、最新の資料を駆使し、豊富な挿図を加えてまとめた画期的労作。難渋な内容を極めて平易に説いており、誰にも判りやすく、日本考古学の大観を知り、知識の整理にも広く役立つ好著。

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2

授業入門

〈全8巻〉

- | | | |
|------------|-------|-------|
| ⑧ 小学校の体育 | 小林 篤編 | 一八〇〇円 |
| ⑦ 小学校の音楽 | 近藤幹雄編 | 続刊 |
| ⑥ 小学校の美術 | 鈴木五郎編 | 二二〇〇円 |
| ⑤ 小学校の社会科 | 岩浅農也編 | 一六〇〇円 |
| ④ 小学校の理科 | 真船和夫編 | 一五〇〇円 |
| ③ 小学校の算数 | 銀林 浩編 | 一八〇〇円 |
| ② 小学校の国語 | 西郷竹彦編 | 一四〇〇円 |
| ① 何をどう教えるか | 柴田義松編 | 一七〇〇円 |

有斐閣／東京神田神保町2-17

日本の大学改革

講座※全5巻

わが国の大学の現状と問題点を総合的に分析し、80年代における大学改革の課題と方法を具体的に追究・説明する

- | | |
|-------------|----------------|
| ① 現代社会と大学 | 9月上旬刊
¥2000 |
| ② 大学教育の改革 1 | 9月下旬刊
¥1800 |
| ③ 大学教育の改革 2 | 10月刊 |
| ④ 学術体制と大学 | 11月刊 |
| ⑤ 大学の制度改革 | 12月刊 |

編集委員 大沢 勝／尾形 憲
寺崎昌男／浜林正夫／山口正之

東京神田 青木書店 神保町1



〈特集〉 販売面からの装幀感

書籍販促活動において、装幀をどう位置づけるか。営業的な見地から、製作的な見地からはどうか、販売に結びつけるべく、第一線の現場から力作を頂きました。

専門書も内容だけでなく、装幀の形態で売れ方の差が出る時代になったのか、時代の波にどう対応すべきか、示唆に豊んだ論文が目白おしです。書店・取次店・版元の活動の一助となれば幸いです。

改めまして執筆下さった各氏に御礼申し上げます。

弘報委員会

一書店人の立場からみた 人文書における装幀とは何か

三省堂書店神田店 川 野 辺 明

中国の友人が日本の書店をのぞき歩いて真っ先に語ったことは、「目が疲れてしかたない。どうしてこんなに装幀に凝る必要があるのか」だったが、逆に、中国書籍に不慣れな日本人が北京の新華書店を見学したとして、

中国の友人が日本の書店をのぞき歩いて真っ先に語ったことは、「目が疲れてしかたない。どうしてこんなに装幀に凝る必要があるのか」だったが、逆に、中国書籍に不慣れな日本人が北京の新華書店を見学したとして、

「目が疲れてしかたない。どうして、本という本が皆同じ装幀なのか」と思うことだろう。例えて言えば東見本の表紙に書名、著者名、版元名のみを書いただけのような中国

書籍を私がわざわざここでひきあいにしたのは、中国の出版界が遅れているようなことを言うためではない。ここに装幀とは何かを考える好個の材料があると思うからである。

ある個人の勝手気ままな装幀論として、次のような見解があってもよいだろう。――

冊の本のもつ価値観は本文によってのみ決まる。ケースもカバーも、パラフィン紙も帯も必要ない。だから、本を買ったらその場でケ

ースとカバーを捨て、帯は半分に折ってしおりとして代用している。装幀云々から離れるが、まえがきもあとがきもいらぬ。ただ本文さえあれば良い。初版本に固執するのも愚かだし、著者のサインも不要だ――。

誰にも思い出深い一冊の本があるう。だが、一冊の思い出の本は、本文のみによって、読者の脳裏にやきつくものではないだろう。手にした時の感触や表紙のデザインの思

い出の方が本文の内容よりもはるかに強い場合があり、また著者にとつても、装幀は本文と同等に自らの意図を明瞭にイメージ化しうる有力な手段となろう。私が最近読んだ本の中で、思い出深い本として、内山嘉吉・奈良和夫共著の『魯迅と木刻』がある。ケースをとると、純白の表紙ボールがまばゆく、背文字は鮮血をおもわせるような赤色で書かれている。中国文学の父と称せられる魯迅はまた中国近代美術の父でもあった。内山氏は魯迅に招かれ一九三一年の第一回創作版画講習会の講師となった。講習会の日、魯迅はまっ白な長衫（中国服）を着てきたという。内山氏はそれを「水晶のすだれの服のようであり、照り返る白銀の雪原のように光った」と書いている。内山氏は自らの著書を魯迅に捧ぐべく、純白の表紙ボールにて魯迅のまっ白な長衫を表出しようとしたのだと私は思う。

日本人によつて書かれた魯迅に関する本は多いが、本場中国においては日本の幾十倍も多い。それらの多くはそれこそ東見本の表紙の上に書名と著者名等が印刷されたものすぎないが、中国の著者たちが一冊の本を著わすことにより、魯迅と対話しようとする時、

本来的に当然、装幀にまで思いをこめるはずである。思いをこめたいがそれが許されぬ情況としたら、それはとりもなおさず中国の出版事情をもの語っているものであり、装幀が質素であるか華美であるかは、それぞれの国の時代性を示しているのであつて、進んでいるとか遅れているとかの議論の対象にはなり得ない性質のものだと思ふ。

装幀とは本の外装のことではあるが、本文と協力して一冊の本を本たらしめるものである。今日の出版事情からして、著者と装幀家は分業せざるを得ないけれども、装幀家は著者の意向にそつてイメージの具象化をなし本を本たらしめることが迫られるし、また、著者は自らの著作の意図を分業者である装幀家に充分よりよく説明し、双方がよきパートナーでありえねば、よい本は生まれない。翻つて言えば、よりよき著者はまた一人のよりよき装幀家でなければならぬし、また、すぐれた装幀家は装幀という作業のみにいて一人のすぐれた著者（作家）であるといえる。以上のべた理由において、著者には著者にふさわしい固有の装幀があつてしかるべきだと考える。経済人類学という新たなる分野をき

りひらいた栗本慎一郎氏の仕事にはかねてから着目しているが、最近刊行された『ホモ・パンツたちへ』の装幀には驚かされる。『幻想としての経済』や『経済人類学の眼』の装幀が栗本氏にふさわしいと思つている読者にとつてはなおのことであろう。『パンツをはいたサル』もあるではないかという指摘もあるうが、『パンツをはいたサル』は光文社の新書であり、これはこれでよい。おそらく栗本氏自身は『幻想としての経済』や『経済人類学の眼』と一緒に『ホモ・パンツたちへ』が並べられることを期待してはいないであろうが、栗本ファンのために栗本コーナーにおかないわけにはいかない。これは人文書、これは一般書（ノンフィクション）と規定して別々の場所に並べて事足りれりとする時代ではない。一般書を取りこんで人文書の棚づくりをしなければ、書店における人文書担当としては失格である。

阿部謹也氏も固有の装幀をもつたすぐれた著者であるが、最新刊の『対談・中世の再発見』の装幀については考えさせられる点がある。『ハーメルンの笛吹き男』『中世を旅する人びと』『中世の窓から』に代表される勝井

三雄氏や安野光雅氏の装幀が阿部氏の世界であつた。対談であるとはいへ、阿部氏の新刊がでることを知った読者は、実際に本書を手にして何を思ったであろうか。おそらく失望感ではなからうか。本を売る側の予測からして、やはり売上部数は少ない。共著であるが故に、平凡社選書という形式を版元サイドは選ばざるを得なかったのかもしれないが、阿部氏にふさわしい装幀がほどこされていたら、何の苦勞もなく、もつと売れたであらう。『ハーメルンの笛吹き男』や『中世を旅する人びと』という財産をもっている平凡社だけに惜しい気がする。附言すれば、これらに『パリの聖月曜日』や『中世イタリア商人の世界』を加えた、いわゆる平凡社の『社会史の本』シリーズの装幀はすばらしい。版元は版元独自の装幀をもつべきであるが、時と場合によっては、著者のもつ固有の装幀にしたがうことも、ひとつのポリシーとしてあつてよい。そのような意味において、筑摩書房が中村雄二郎氏の『パトスの知』を著者自らの装幀に委ねたことは、たたえるべきことだと思ふ。『パトスの知』の装幀は青土社から刊行された『考える愉しみ』や『精神

のトボス』に酷似しているが、それもそのはず、これらは全て、中村氏自身が装幀しているのである。すぐれた読者にとって、蟲眞の著者がどこの版元から本を出すかなどということは本来的に瑣事な部類に入る。それよりも著者と装幀とのつながりの方が重要な意味あいをもつものと思われる。

栗本、阿部、中村三氏の著書の装幀についてはあくまでも人文書を売る側の立場からみた私なりの提案であるが、以下、若干の紙面を私個人の好みの問題から、私にとっての一冊の本、一冊の装幀を披露することに費すことを許されたい。

内村剛介氏の『わが思念を去らぬもの』の装幀は今ほなき香月泰男画伯の手になるものである。内村氏は短いエッセイですら、スターリン・ラーゲリの体験をふまえて書きつけている。シベリア体験を共有する香月氏であるが故に内村氏の著作をシベリアで死んでいった無辜の人々のどくろにまつつみこんだのだった。

水上勉氏の『金閣炎上』の装画は平川敏夫氏の「樹煌」からとられている。「樹煌」が金閣寺焼失をテーマにしたものかどうかは知

らないが、水上氏が金閣放火僧の魂をよびもどすべく、あえて書かざるを得なかった執念が装幀ににじみでている。放火犯人は三島由紀夫の描くように絢爛の美に殉じたのではない。

尾崎秀樹氏の中国エッセイ集『西湖のほとり』も忘れられない本である。有斐閣選書の一冊として刊行されたが、装幀の色調といふ手ざわりといふなじみやすい。書かれていることは、尾崎氏にとっての現代中国のことであるが、装幀に書かれた中国古代の馬車が異和感なしに尾崎氏らしさを彷彿させる。

以上、述べてきたことは、私個人の装幀についての勝手な感想にすぎないが、ついで、書店人の立場からみて人文書の装幀をどのように見ているか、という本稿において私に課せられたテーマに対し述べたいと思う。

言うまでもなく書店にとっての本とのかかわりは、それが商品として良いか悪いかにあるのであつてそれ以外の何ものでもない。人文書の不振が声高に叫ばれてすでに久しいが、はたして人文書の季節ははやめぐりこないのだろうか。人文書が売れないと言われているが、製作者たる版元はそれなりの対

応、売れるための努力をしているのであろうか、とまず設問してみる。確かに人文書の今日は厳しい。かつては努力の割以上に売れた時代があったが、今や、売る姿勢がなければ売れなくなっているということは、版元・書店共通の認識であろう。いわゆる待ちの姿勢から攻撃の姿勢への転身が好むと好まざるとにかかわらず要求されているのである。書店の立場から言えば、積極的な売場展開が迫られている。こうした書店の現場サイドにとって、装幀は何よりも販売効果という面から実に切実な問題が喚起される。人文書は言うに及ばず書籍の装幀の基本は、装幀が本文の内容にマッチしているかどうかにある。マッチしていなければ、いかにすばらしい装幀がほどこされているとしたとて、ちぐはぐな本が店頭を飾ることになる。書店人にとって、装幀は店頭効果として有効か否かの一点のみにあるとさえ言いうる。われわれは新刊案内によって事前に注文部数を発注することを基本としているが、実際に新刊書を手にしたその瞬間において、その本が売れるか売れないかを判断するのが常である。新刊事前発注よりも新刊を目前にしての新刊会議の方がはるかに

に重要な意味をもってくる。担当者の目ききが新刊書の命運を左右する。書店人の一日はまさに多忙をきわめる。取次から送られてくる本の一冊一冊を、タイトルはどうか、著者は誰かなど、それこそ皿をなめまわすように吟味して店頭に送り出す余裕はない。新刊書が商品として生き残るかどうかは、無責任にも聞こえようが、本の装幀と対峙した一瞬にあると言っても過言ではない。

さて、人文書の装幀だが、やはり現状として他の分野の商品群に遅れをとっていると思わざるを得ない。製作者である版元が、商品としての人文書に入念に手をいれた装幀をしているとは思えない。人文書は幅広い年齢層、職域から読まれるのではなく、限られた特定層の人々に読まれれば、それでいい、だから装幀に力を入れる必要はないと思っているわけではないだろうが、装幀に人文書らしい思想性を感じる本に出会うことはまれである。内容(本文)さえ良ければ本が売れるという時代ではない。むしろ、本文を読む以前に、装幀から本文を敏感に察知してしまう読者層が増えている。

装幀の基本は色と形にあるが、人文書にお

いては色の面での遅れが著しいと思う。雑誌や文庫新書のように極彩色豊かな派手な装幀をせよと言っているのではない。著者の個性をひきだすわけでもなく、タイトルから何かを連想させるわけでもなく、ただ茶色のケースに入っ、いかにもそれが人文書でござい式の味もそっけない装幀がこれまで多すぎはしなかったか。要は時代感覚を的確にとらえコンビネーションとしてのカラーに留意した装幀に心がけるべきではないか。そうすれば固有の装幀をもった本が店頭を飾るであろう。固有の装幀はそれ自身、顔であり、顔をもった版元、著者が増えてくれば、書店の人文書売場が、従来にも増して、明るさ、楽しさを創出することとなり、読者需要の新しい喚起が期待できるのではなからうか。

販売現場よりみた装幀

U氏へ

信山社 小用茂夫



を対象とした専門書の購入動機実態調査をみてみます。

- ① 店頭でみて 三五・九%
- ② 先生の紹介 三二・四%
- ③ 友人の話題 一九・三%
- ④ 読んだ本で 九・三%
- ⑤ 新聞・雑誌の書評 四・九%
- ⑥ 出版社目録 四・九%
- ⑦ 新聞・雑誌広告 四・一%
- ⑧ 図書館でみて 三・九%

(大学生協「第一七回学生の消費生活に関する実態調査」)

専門書においても衝動買いと置きかえられ

のがよいと思うか、特にケース入りの本はどうか述べよ」ということです。ここでは本が入荷し棚に並べられ買われる、販売現場に視点を置いて述べさせて頂きます。したがってここという装幀とはカバーの商品性、デザインといったものを意味します。氏の設問の前提には、主に人文分野の本を対象に、また背景には、編集部に対し「売ることとも考えて作って欲しい」という意向があつてのことと勝手に解釈していますので、そのあたりの強調が過ぎるかもしれません。

本はどのように買われるのか、それがここで装幀を考える際は基本となります。大学生

装幀と一口にいっても、それが作成されるまでには、多様な要因のからみ合いのなかで出来あがるものです。それらを思いつくすまで列記すれば、①内容との関連、②著者の意向、③返品を含めた物流に対するの耐久性、④保存性、⑤定価とのつりあい、⑥装幀自体の時代性、⑦商品性から見たデザイン・スタイル、⑧装幀者の創造性、⑨造本との関連……などでしょう。当然、装幀を語るには、これを取りまくさまざまな要因を個別に踏まえ総合的に検討されねばなりません。

ただU氏より課せられたことは「実際に本を販売していくうえで、装幀はどのようなも

る「店頭でみて」が最高率を示しています。専門書と限定せず一般を対象とした調査ではこの部分は五〇・三％となります。（日本経済新聞社調べ）大学生の調査の特徴は「先生の紹介」「友人の話題」といった人的媒介による動機が五一・七％も占めている点です。もちろんこのなかには、先生からサブ・テキストなどで指定されて半ば強制的な数字も入っていることでしょう。しかしそれを差し引いても圧倒的な数字であることに変わりはありません。次に、その本を紹介し話題にした「先生・友人」はなにによってその本を知ったのか、という問が生じてきます。これをもう一度各項に振り分けるとすると、友人が友人に、友人が先生に、はあっても先生が先生にというのはあまりないでしょうからこの人的媒介項は相当減る筈です。減った分、つまり書店での二次的衝動買い、二次的広告効果をそれぞれに加算すると、「店頭で」の比率は一般書のそれに近づいてゆくと思われるかもしれません。あまりこのあたりにかわっているときりがないので止めにしておきますが、最後にこの順位に極めて恣意的に意味づけをしています。

①本自体が発する直接的な刺激から②③先生・友人といった身近かな人間関係と④⑤その延長としての著者・評者による紹介、⑥⑦最後に版元が出す目録と広告。⑧の「図書館」は割愛しますが意味性としては①か④に付随します）ここに読者が本と出会う動機のあるようは〔直接性√間接性〕という構図で読みとれます。

高度な情報化時代といわれる今日、出版情報も増え続けていますが、この「実態」を見る限りより直接的で身近かなものを尊重する傾向があるといえます。むしろ間接的な情報が増える程、個々の効力は相対的に減少し、また、それらが矢継ぎやに出されることで情報息も短かくなっているのでは、とも考えられます。書評や広告が、実売数に結びつき難くなったのもその表れでしょう。出版情報は並列的に「本を知る」機会を増やしたが、反面では「実際に手にとる」こととの距離をつけているようにも思えます。

前提が長くなりました。というのも実際の装幀を見る限りでは以上の「実態」に見合ったものになかなかお目にかかれなからです。それは装幀が、購入実態に即してという

よりも、別の要因に多く依拠して作成されている結果と思えてなりません。これは、造本の技術的な問題ではなく、店頭における衝動買いをどうとらえるかという「考え方」の問題です。

読者と本との出会いの接点において、重要な役割を与えられるのが装幀ということになります。もちろん、この時点で購入衝動を煽るものとして、タイトルのつけ方・著者の知名度・その本の定評・定価などがありますが本題から外れるので触れません。

ここで重要なのは、一冊の本それ自体が、出版情報であり、広告であるという考え方です。しかも、最も直接的な、したがって確実かつ強力な武器だという認識です。

そして店頭は、単に販売の場だけではなく、最も効果的な出版情報と広告の場であるといえます。また一方の極には、他の本の寄せ集めのような内容で、やたらに目立とうとしているドギツイ装幀も一般書などに増えています。もちろん、これらを推奨しているのではありません。装幀の広告的観点でいえば、この類は過剰広告です。問題はもう一方の極にあります。内容が充実していて、多様

な刺激に富むものが、装幀によって封じ込められてゐる本です。造本学的にいかにも立派なものでも、ここである装幀の機能からすれば失敗といえます。

装幀の視覚的機能が、他と独立して存在しないのは先に述べた通りです。また、店頭における衝動買いが、他の媒体による情報の前提を必要としないと仮定すれば、装幀は読者に対し内容の仲介を果さねばなりません。ここでの役割は、読者を視覚的に引きつけ、内容に繋げていくことです。つまり、内容への正当な知的好奇心を喚起させるイメージやセールスポイントを表出させることにつきるような気がします。

さて、こうした観点からケース入りの本をみてみます。まず、ケースが似つかわしい本をみてみます。愛蔵本・豪華本・限定本・記念出版物・復刻本・予約出版物・学術書などがあげられます。これらのケースはそれぞれ立派な役割があります。またこれらの本に共通しているのは、店頭での衝動買いをそもそも見込む必然性がさほどないところです。ここでは、ケースが似つかわしくないケース入りの本を対象とします。つまりケース入りで

ありながら広範に読まれる内容を有するもの、あるいは多くの衝動買いを期待できる本のことです。

このような本のケースから、枠・甲冑といったものをイメージします。枠は形式・權威、甲冑は防衛、固さ、重さといった意味です。これはケースが視覚的にもってしまふ機能のようです。ここである装幀の機能からすれば、ケースは塵や汚れから中身を防いでいると同時に、本自体の宣伝効果を弱め知的欲望も防いでいるといえます。

またケース入りの本は、デザインをいかに工夫しようとも補えない難点が在ります。それはケースからとり出さなければ内容と出会えないという点です。なんだそんなことと思われるかもしれませんが、何万冊とある書店のなかで、ケースを抜きとって中身を見る労とはたいへんなものです。これは一冊の本を精魂込めて作る著者・編集者と一日数百冊の本を扱わねばならない書店員あるいは流通にたずさわる人との隔たりであるかもしれません。平積みされている本でケースが無ければ、装幀が多少悪くても、著者・書名から好奇心を覚えれば、片手で内容を見ることがで

きます。ただ、それがケース入りの場合どうあがいても両手を使って中身をとり出さなければなりません。販売現場から見た読者は思った以上に性急で面倒臭がりな方が多いものです。

ケース入りの本にはグラシンが付いているものがほとんどです。これは出すときにはさほど問題はありませんが、つけたままだと手にとって読むにも、すべりやすく邪魔です。ケースに収納する際には、あらためて本に合わせなくてはなりません。またこの出し入れで破けやすく汚れやすい難点もあります。破れかかったグラシンを気にされながらケースに納められている読者を見ると申し訳なく思います。買われる時点で、完全な形でついていると嫌がられることも結構あります。これは書店自身の問題となりますが、グラシンを常に取り替えてきれいにしておけばいいのですが、そこまで手がまわらないのが実情です。

仮に、衝動買いの過程をへ見るへ、手にとり内容に触れるへ、へ購入しようと思ふという段階に分けてみます。ケース入りの本は、このすべての段階に衝動を阻害する要因

が潜んでいます。実際の局面では、中身を取り出して収納しなければならないという「行為」の煩わしさは、「視る」段階に集約されてしまふでしょう。つまり「視る」と同時に面倒臭さを感じて素通りされるわけです。手にとられるのは、それだけの労を惜しまぬだけの興味を「視る」段階で決意されたときだけの衝動買いとは、考える以上に微妙です。とくに本の内容にとっては、極めてささいなことに左右されているといえます。

近年、読者の活字離れ、ニーズの多様化、売り手市場から買い手市場への変化等、装幀をとりまく環境もおおきく変わりつつあります。やや、おおげさにいえば、店頭で本は装幀という「面」を通じて時代状況と向きあっているともいえるわけです。こうした時代の変化のなかで新たに脚光を集める小分野があります。（記号論・精神世界・身体論・エコロジー・文化人類学・中世史論等の一部）これらに、ここでいう装幀の合格点に近いものが比較的多いようです。それは、内容がもつ意識性や視点の新しさが、新しい衣装を要請するからといえましよう。また、新しい小分

野ゆえに確定した読者層も希薄なはずですが。そのために、新たな読者獲得を目指すを得ない条件がそもそもあったからではないか、ともとれます。言い換れば、店頭での衝動買いを最大限生かさなければならぬ必然性が、とくにあったから、といえます。

装幀が変化していく歴史を、おおきなところで見ると、出版する側のそれぞれの時代に対する問題意識の変化なのだ、という読みかえもできるような気がします。個別の装幀の評価の違いは、個人的な好みにも属するものを除けば、底のほうで時代に対する意識なり感覚の違いにも、関わってくるようです。とにかく、既存の装幀のほとんどが、時代の変化に対し、特にその先端にいる若い読者に対してうまい媒介機能を果しているとはいえませんが。とはいっても、本の内容まで古臭くなつたわけではありません。古典を含め多くの既刊書は、新しい読者を魅了する古くて新しい意味作用を有しているはずです。だとすれば最も大きなズレが生じているところは、読者と本との接触面です。つまり最も変わらねばならないところは、そこに橋渡しする部分ではないでしょうか。

たかが装幀、内容さえ良ければいい、という「考え方」は、不必要に食わず嫌いの活字離れの読者を増やしかねない、おかしな「時代」に入ってしまったように思えます。

装幀には全くの門外漢が、狭いところから独断を述べさせて頂きました。ここで当然触れなければならない、帯や判型、シリーズものの装幀のこと、それに最も肝腎な書店の業務と機能との関連など紙数の都合で割愛させて頂きました。



同時代としての装幀

新宿紀伊國屋書店 齋藤 進



突然だが、「輝け!! 日本装幀大賞」なるものを提案する。年末に、その一年間に発行された新刊のなかからよりすぐり評価の高かった装幀を発表し、表彰する。審査員は版元・取次・書店・読者の構成からなる。年末のある日を設定し、閉店後の本屋を、さながら観光地を歩く団体客の如く徘徊し大賞候補作品を捜しまわる。戦いすんで日が暮れた本たちと、夜に蠟く審査員たち……。なぜ、深夜の本屋の本棚の前で日本装幀大賞候補を決めるのか、その理由は後に述べる。

装幀とは何だろう。手近の小学館国語大辞典をまずひらいてみる。そこには次のように

書いてある。「書物などを綴じて表装すること。書物の表紙、見返し、とびらなどの体裁をつくり、外形を整えること、またその意匠、装本」

なんとも、そっけない解説である。そのものがズバリであって正確ではあるが、基本概念が浮かんでこない。装幀に対して非常な思いいれがある私としては、いとしき乙女に身を焦がしつつも、こちらを振りむいてくれなく、淋しい気持がするのだ。

装幀に関する学術的な分析は出版ニュースの庄司浅水氏の著作にあるので、私としては日頃の書店現場におけるの想念、妄想を以下

に展開したい。

装幀にあて字をしてみると装幀の意味が少しづつ解ってくるようだ。

総幀（トータルな表現）・創幀（クリエイティブな思想）・草幀（バビルスのアトモスフィア）・宗幀（かなめになる）・騒幀（そうぞうしい）・瘦幀（貧相である）・操幀（処女性がある）・喪幀（前の操幀と逆で、節操がないもの）・葬幀（土のなかに静かにほうむりたい気持にさせる）……個々の本に、どの装幀があてはまるか考えるのは楽しい。

本にとって装幀とは、表紙は中身に従属する立場にあるのだろうか。商品として消費財

としての本は、ファッション機能としての装幀が中身（サブスタンス）を、二次機能が一次機能を超えて有効性を持っている。すぐれたブックデザイナーがその本のイメージを決定し、著者がかすむのである。

一時代前、弊衣破帽がはやった。北杜夫氏の「ドクトルマンボウ青春記」を読んでも、また旧制中学の流れをくむ地方の進学校にも見られるが、ボロをまとい、一本歯の朴下駄をつっかけ、デカンショ。一般大衆から、あえて、かけはなれた服装をし、哲学・芸術を語る。一般大衆に対する心身両面から差別化をはかり、知的エリートとしてのアイデンティティの確立をする。それとバラレる関係で、出版社があり、出版物が存在していた。日常生活への侮辱化をおしすすめていくなかで対立概念としての精神を高めていく作業は精神貴族としての自己確立の道であったのだ。大衆文化と前衛芸術作品との間に、男と女以上に深い河があり、それはまさしく渡れぬ河で、ありつづけた。六〇年、七〇年の政治の時代は、床屋のオヤジが「学生さん、一発騒いでくれな」と今の日本は良くなりませんや」と長髪はやりで床屋で閑古鳥が鳴いて

商売があがったため、営業政策上、学生を持ちあげる風潮があった。飢えたものよ、夜明けは近いと唱いいつも夜明けはこないいま、八〇年代の今日、いつのまにか、ウォークマン、ディスコ、サーフィンの流行の真只中。サーファークットの「ウツソー」「ホントォー」という記号言語をあやつるヤングギヤルと商品政策上、称されるコピー人間が巷に氾濫。このウツソーギヤルにもてんがためには厚手の本は捨てねばならぬ。黒縁の眼鏡、万年床、四畳半、日雇い、長髪、ジープなどネが暗いの一言で、過去の遺物。「神田川」のイメージは死にたえた。ポパイファッションをし、素肌にはオーデコロンをばっしばっし、ピアを小ワキにかかえれば、もう一つのワキには若い小娘をかかえられるという寸法。男も女も、ウツソータムをやりとりする。これはどう考えてもウツソーと言いたくなる。しかしこの輩、消費社会を象徴するところの代表選手である。

少し引用が長くなるが、ボードリアールの「消費社会の神話と構造」の一部を紹介したい。

——文化変容を経験するすべての人びとを

待ちうけているのは文化そのものではなく文化のルシクラージュつまり「流行に通じていること」「何が起っているのかを知ること」であり毎月毎年自分の文化的パノプリー（セツト）を更新することなのである。この種の強制は、(1)作品・思想・伝統の遺産(2)理論的批判的思考の切れ目のない広がり—批判的超越性と象徴機能という意味での文化とは正反対の概念なのだ。文化のこれらの二つの性格は次々に役立たなくなつてゆく文化的要素や記号からなる周期的に変化するサブ・カルチャーや、キネティック・アートから週刊百科にいたる文化の現代的形態—ルシクラージュを受けた文化によつて否定されている。決定的な重要性をもつのは作品が、毎年モデルチェンジされる自動車と同様一時的な記号とならざるをえない。文化的な内容は共示として二次的機能としてしか姿を現わさなくなつてしまった。だから文化をもつばら意味の象徴体系として理解しようとする態度を押しつけて、文化を記号の体系としてとらえ、それらの組み合わせで遊ぼうとするのである。「ベーターヴェン・最高さ／＼」という具合だ。

出版社のなかで、伝統的英雄でありつづけ

たA書店もB書房も記号の体系としての文化のなかで呻吟している。時代精神の落し子である人文書においては、読者といかに時代精神を共有できるかに再生はかかっている。

西洋哲学・日本の西田・和辻の哲学・教養書の時代には、哲学・思想の本が良く読まれベストセラーになった。政治の時代には、左翼の本、パンフレット類が大量に売れた。時代時代で、その時代を画した(代表的で、なくてはならぬ)出版社というのは常にあったし、それも、様変りをする。しかしながらそういう変化以上に現代において本のとらえ方が全然違ってきている。モノとしての本は有用性の機能よりもファッションとしての機能になってきている。

「広告が初め実用的機能を伝えるメディアであった。しかし大量生産と大量消費の循環を強要する資本の論理の下で、広告は商品を豊かなイメージの流行やブランド(記号的機能)に結びつけるメディアに変身した。どのブランドや、どのイメージの商品を所有するかは、人々の社会的地位を識別し、文化的に階層を差別するコードになっている」(「記号としての芸術」(勁草書房))

「工業デザインは明確な本能を担っている工業製品に環境、雰囲気などのいわば二次的機能によってそれらを結びつけるための美的均質性と形態の統一性あるいは遊びの面を付与することである」

次に流通過程において装幀はどういう意味を持っているか。

装幀などどうでも良い、とまで言わなくても、あくまでも二次的なもので、本は内容が勝負である。こういう代表的意見がある。版元の大小を問わず編集者に多いと思う。だがこの意見には商売の論理が欠落している。

「良書」——地味な装幀——書店において差し本——ますます目立たない——幸運にも捜しえた人が買う——少数者——書店への利益還元が少い。——地味な装幀は喜ばれない。こういうシステムがあり、書店員は、変な装幀にはかなりの拒否反応をしめす。

まず基本的に、メーカーが新製品を出すときは、きまつて新モデルである。内容が良いから何年間も旧モデルのままというのには仲々ありえない。イメージ広告を駆使して販売努力をし、客を小売店へ向かわせる。

数百坪、何十万冊在庫の大型書店において

一冊の本を捜すこと、めぐりあえることは至難の技である。本にとって、自分の存在をより多くの人に知ってもらい、購入していただくには、広告・宣伝を除けば、自分一人の力で、群衆のなかで光り輝く個であらねばならない。目立つには内容以前に装幀が一番重要なのは言うまでもない。

ここぞなぜ閉店後の本棚の前で日本装幀大賞を決めるのか理由を述べたい。装幀は全体の調和のなかの一パートとして、よしあしがどうか検討すべきと思うからだ。装幀は、その本だけで評価を下げない。美人は常にブスを友達として連れて歩いているからこそ美人であり、また眼のさめるようなブルーの服も、じゅうたん、カーテン、ソファ全部がグリーン部屋にはいったら好趣味から悪趣味へと転落する。ブックデザインをする際には、その本の置かれる棚の位置まで考え、色あいなど検討した方がよい。

現在の人文書のなかで、個人的に「輝け日本装幀大賞夏の部」を選んでみる。個人賞一位「劇場都市」三省堂。これはブックデザインのこれが見本だというきわめつきの本。これにまさるものはない。グランプリは当然の

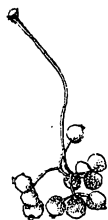
ところ。二位「パリの聖月曜日」平凡社。一連の社会史の本の一冊、これも棚のなかで光っている。三位「サーカス」せりか書房。この本が輝かしくデビューした時は何と鮮烈であったことか。四位「新南島風土記」大和書房。八重山の海の風と色が伝わってくる。夏向きの本。五位「気流の鳴る音」筑摩書房。写真にあっさり、タイトル、サブタイトル、著者名がはいっているだけ。想像力を喚起する。そういう本はカバーだけでも自立していて商品になりうる。それにつけても図書館の衣裳をとられたむきだしの本の群れは何だ。団体賞(版元)一位せりか書房。「サーカス」以外に「水の神」「衣裳のフォークロア」「ベルリン」「中国の女たち」と記号論的装幀には頭が下がる。二位平凡社。阿部謹也「ハーメルンの笛吹き男」「中世を旅する人びと」他、「路地裏の大英帝国」「中世イタリア商人の世界」「アリラン峠の旅人たち」等、民衆史の分野で独得な判型、装幀は人文書版元で非常に目立つ。三位人文書院。一見して、すぐ人文書院だとわかる、品の良いクリーム色の装幀は、自分の本棚に全部揃えてやろうという気持をおこさせるほど魅力的

である。四位青土社。都会的センスで、ハードカバーにこだわるのも良い。五位晶文社。白地を中心としてすっきりしている。

前出の大家幹雄「劇場都市」によると「都市はわけても自覺的に構成された場合には、その都市に固有の宇宙論、プランニング、建築、祭祀、礼儀作法、哲学、見世物、文芸、工芸品、流行、逸脱などを表現する。個々の都市はそれぞれの解説すべきテキストなのである」

都市を書店とおきかえてみる。劇場としての書店で演じられる仮面劇の仮面は何だろうか、本の表面をおおっている一枚の表紙(装幀)を仮面にたとえることができるだろうか? 仮面というのは表情を殺すことによって下に隠れている、よりダイナミックな表情を表面化させようという技術と言う山口昌男氏の論を装幀につなげたい考えから離れられない。「仮面」というものは文化の側から出発するけれども、どこかで人を自然の側にさらってしまふような仕掛けである。仮面そのものが仕掛けの役割りを果たしている。仮面のもつ自然へ人間を解き放つ能力というのは、限定された近代的な自我とは違った意味で、

人間の精神をもっと広い宇宙に向かって解き放つ役割りをする。仮面というのは規則的な時間に対抗して人間を一挙に端のほうにもっていったり、周縁にもっていったり、あるいは突如として中心に立ちあがらせたり、時間・空間もアクセラレートするような仕掛けである。時間・空間の変換装置という役割りが仮面においてはいちばん大きい。仮面がいちばん力を発揮するのは対位的な空間で最終的に劇場と結びつく「山口昌男」『へ特集仮面』より。



装幀雑感

〈そうてい〉

そうていとは、装幀とも書くし、装釘とも、装丁とも書く。辞書によれば、装^まい^お訂^きめるの意であって、装幀が正しい用字であるという。

装^まう^お、という感じは、今も昔も本造りにおいて変りがないように思うが、幀も丁も釘も、現在のそうていにそぐわないような気がする。用字として正しい「幀」を辞書で見ると、絵絹を張る。軸などを仕立てる。などである。本でいったら表紙に当る部分である。箱に入った本以外に、カバーの付かない本は無い。帯もそうである。カバー絵いかによ



装幀家

司

修

って本の表情が変り、売れゆきも変るとすれば、そうていといった場合、今ではカバー絵になつているといっても過言ではない。つまり、現代語としては、装幀は似つかわしくない訳である。ブックデザインといった方がびつたりするようだが、やはり、あのそうていはいいい、といった方が日本人の本という感じがある。では、正しくはないが「装丁」にしたらどうだろう。「丁」が使われたのは、「釘」の略であつたのだからか。話はそれるが、「丁」の字が、アルファベットのTと同じ形のところは面白い。さて、「丁」を辞書で見ると、①課役にあてられる成年者。壮丁、丁

壮／丁男、丁女②召し使われている男。／丁稚。その他、あたるとか、ねんごろとかの意味を持つらしい。ここで思い当るのは、装丁とした場合、本を装^まうために（召し使われている男）と曲り読みすると、どこか我が姿が浮んでくるようで気持ち悪い。では「釘」かというとうと、どうもピンとこない。クギなど使った本は、日本には無い。西洋において、まだ印刷技術も無かつた頃、羊皮紙を用いて造った部厚い聖書や讃美歌の楽譜集などの表紙には、金具や釘が使われている。表紙は板であったり、厚い皮であつたりするから、釘が無数に打たれて装飾の一つになつていたりす

る。世界に一冊きりない本などにびったりな文字だが、今の本にはぜんぜんむかない。やはり、一番近いのが「装幀」である。箱装の場合など、現在でも布装が多く、まったく失われてはいない意味を持っている。しかし、内情を申すと、例外をのぞいて、不景気時代の読者に答えるべく、装幀の材質を落して、読者が一番気にするところの定価にすべく、イミテーションずくめに身を固めるのが常識になってしまった。装幀というのは、そもそも、本文用紙の選定から、活字選び、レイアウトなどもふくめ、ようやく、表紙見返し扉カバーなどの材質を選び、デザインに入っていくのが本当らしい。が、多くの出版物はそういうコースをとらない。僕の場合など、装幀依頼がある時は、もうゲラが上っている。又、そうでないと、沢山の出版予定は進行しないだろう。

装幀という文字が、化石化しているといえるのは、美術学校などでブックデザインを勉強している人たちの発表会を見ると、(先生に見せるためにはそうしなければならぬのか)超豪華本のための造本をしている例が大多数だ。ペーパーボックスを交えるようなデ

ザインは見つからない。まさに書物の化石を見るのである。

〈良い装幀〉

——一般の読者が手にとれないような本が賞をとっても、あまり意味がないのではないのでしょうか。数万円もする本はそれなりに製作費をかけられる訳で、欠点があった方がおかしいのですから。

——そうですね、読者の代表としては、やはり、普通の人が買える本に賞を出したい。

——しかし、我々専門家が集まって審査したとなれば、安い本だからしかたがないという言い訳は立たないでしょう。

——そうです。私の立場で申せば、印刷された字がかすれていては困る。圧が低くても多くてもいけない。これは常識ですがね。デザインだけではね、装幀は通用しない。どうですか、製本については。私の方は、我慢しろといわれれば出来る程度ですから。

——うーむ。これはうちのものではないが、いい方でしょうな。今はほとんどが機械で製本しますから、特別いい製本となると限定本などのように、昔ながらの手造りでないと出来ません。ま、機械といっても、気を使

う工場と使わない工場では、安い高いではなく差が出てくるでしょうが、これなどいい方です。表紙がなくなっていきますが、冷房で空気が乾燥しているから仕方がないでしょうな。特にこれ一冊ではない訳ですから。厳密に言えば、こうしたことがないように製本できますから、減点になるでしょうが、それだけお金がかかりますからね。

——デザインの方はいいですか。安い本と高い本と、という差はデザインにはないでしょうか。

——そうですね、ここには一冊百万円もする本もあれば、文庫本で五百円という本もあります。これらを一緒にして比較することはデザインでも無理ではないでしょうか。百万円はちょっとかけ離れています。が、一万円か二万円位の限定本は、デザイナーの好みの材料を使って造られてるし、時間もかけています。そういった意味で、個人全集などは、地味な装幀で、材質も、読み捨てではないところから良いものを使っていますから、誰もが買える値段で手頃なところだと思えますが、何といっても、一番読まれる本というところ、推理小説や文芸物ですね。そういうものから賞

を出すことは、この賞が一般読者の興味を引くことにはなりません。今選ばれている本はたしかに良い造りで、ガッシリとしています。しかし、愛想がない。多分、編集部内ですべて装幀したものでしょう。たしかに活字やら製本もしっかりしている。表紙なども文字だけですから、すっきりして、伝統的な手法が生かされています。本の模範といってもいいと思います。が、それを生かしてさらに新たなデザインがなされている時に受賞の対象になるのではないのでしょうか。たしか、去年もこのA社の本が受賞したと思います。

——模範といいましたがね。そういうものを選ぶのがこの賞なんだ。

辞書に似たA社の本は、たしかに難がなかった。デザイナーの推す四六判のカバー本は、それと比べると貧弱に見えた。デザイナーの熱弁によって、半数の支持者が出たが、結論が出ず、結局、思い思いの書名を書いて無記名投票することになった。すると、どちらの候補も落ちて、数万円もする限定本が受賞することになった。

へ本らしい本

僕の手元に、一九二七年発行の「アーサー

王」がある。ビーズレー装幀装画で、オリジナルエッチング二葉が入っている。A四判に近い判型の大きな本は、ビーズレー特有の絵で金箔がなされ、厚表紙ノンカット装である。近代の本の代表としての風格を持っている。

五十五年の歳月、何人も人の手に渡った痕跡を持ちながら、依然として壊れず、手垢はむしろ、書物の風格を作っている。表紙は黒いクロスに純金箔。見返しは、本文紙と同じで心許ないが、意外にしっかりしている。

本文紙は、木炭紙のように横縞が走り、裏は布目様の、裏面のはっきりした藁半紙に似た色具合の紙である。印刷技術の発達した現在でも、裏表のある紙は本文紙として敬遠される。インクの濃淡を気にするからである。しかし、ここにある「アーサー王」に関しては、絵も文字も、メゾチントという、銅版画では、もつとも黒い表現のできる方法で刷ったと思えるような刷りである。画面の八〇%が黒くつぶしてあっても、ムラ一つない。それは五百三十八頁全てにおいて変りがない。僕は意地悪になって、一頁ぐらいカスレはないかとめくってみたが、残念にもないのであ

る。一頁に一枚は小さなカットが入っているのだから、一冊に五百のビーズレーの絵が見られる。どれ一つとして同じ絵がないのだから、大変な作業だったろうと思う。そうした絵にムラがないことは、文字にもないということである。千六百部の限定本だから、当然だといえど当然である。よく目立つ。

「装幀」と聞くと、右の本のような完璧な出来具合を想起するところがある。読者の、出版社の、あるいは専門家の奥の奥の意識にそうした装幀像があるようだ。

「装幀感」

装幀をやりだしてから、かれこれ十八年になる。その間に、全集ブーム、詩集ブーム、なんとかブームという流行がいくつも通り過ぎていった。読者は気まぐれで、昨日まで飛びついたものに見向きもしなくなる。けれど辛いかな、僕は装幀という仕事に、流行を取り入れることもなく、その本の持つ固有のイメージを絵にしてこられた。それは、ほとんどの本が文芸書であったからだろうと思う。また、それしか僕には出来なかったろう。過去において装幀について知っていることといえば、自分が読んだ本のうちの、何冊

かについて記憶にあるが、はっきりしているのは戦後からだから、表紙のとれた本文だけの裸本とか、厚表紙でさえ、皮のようにやわらかく手でもまれたものだった。自分の働いたお金で買うようになってからは、均一物が多く、たまに無理して欲しいと思った本を買うと、大変な負担がかかって、食事をきりつめなければならぬような状態だったから、僕の本箱は文庫本が多かった。後はなるべく雑誌で読むようにしていた。だから、単行本の装幀などまったく無縁だった。そのような人間が装幀をするようになったのだから不思議である。

表紙がなくなつて十円均一に並んでいるのも、欲しいと思つていたものが見つかると思つたものだ。そうした本に簡単な手造りの表紙をつけて、背にタイトルを書いた日が、僕の装幀の第一作目であつた訳だ。僕の装幀に対する気持ちの中には、その頃の想いが濃厚な気がする。

だいたい僕は、絵を描いていたことから装幀とかかわりだしたが、それについて勉強もしていなければ研究もしていない。そういう人間が、十八年もの間やってこられたのは、

装幀という意味が、本来のものでなくなつて、大量生産時代の、カバー装画というものが装幀といわれていたからだと思う。装画が、テレビコマーションと同じ意味を持つようになつてゐるのは事実だ。しかしだからといって、文芸書の装幀をテレビ的にしたら良いというものではない。

最近、イタリアの各地を回つて、古寺の壁画を見てきた。そこで、通りがかりの、いくつかの書店に入つてみたが、入口を入つたフロアは、日本の、どこにでもある書店と変わりなく、カバー本の表が見えるように台や棚に飾つてあつた。奥へ行くにしたがつて、高価な本になつてゐるようだったが、そのまた奥は、図書館というか、倉庫というか、無愛想な棚にぎつしり本がしまつていて、店員が四、五人、棚の間をいきまして本を取り出し、客に手渡してゐた。客は、買いたい本を買いにくるが、見にくる客は第一フロア止まりというシステムだった。それは、玩具屋兼児童書屋も同じであつた。書店の姿勢もさることながら、読者の違いというものを感ぜずにはいられなかつた。豪華な画集も、ボール紙だけの箱であつたり、フランス装という、

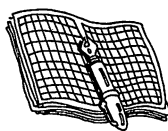
読むためには何の支障もない簡単な装幀が、いまだ通用するのめわかる気がした。

〈僕の姿勢〉

僕が装幀した本は、ほとんど文芸書である。書かれた小説のイメージを、僕なりに捕えて、絵や文字のレイアウトをやつてきた。出来上つた本について、著者が気に入つてくれたものが、僕の成功作である。僕なりにすることが、著者に気に入られない場合もあつたろう。それは僕の思い違いか、内容の出過ぎという時である。時には、編集部で気に入らず、ボツになりそうだった装幀が、ベストセラーになつて、のちのち、その絵が文庫にも使われたという例もあつた。僕が装幀の仕事が続けるとしたら、おもねるのではなく、第一に著者の喜ぶ本を目的とするだろう。

装幀嫌いの弁

勲草書房 富岡 勝



装幀をするのは苦手である。編集者の中には、楽しんでやっている人も多いだろうが、私のようにいやいややっている者もいるはずである。「装幀論」でもやらせようというなら明らかにミスキャストだから、ここでは社内でのささやかな装幀論議でもご披露して責を塞ぐことにする。

勲草書房で装幀や表題のつけ方がことさら話題になり始めたのは、ここ数年である。背景にあるのは、勿論、人文書の売上げ不振がある。原因については、「人文会ニュース」でもたびたびとり上げられ論じられている。中でも読者の活字離れ、などと達観してい

れない版元の座談会が一番身近で切実であったが、参考になったのは書店や生協の感想であった。編集者としての反省も込めて整理すれば、①若い人々が総体として本を選択しない（読まなく）なってきた中で、②本を読む少数の人々は従来とは違った枠組から展開される話題に関心を移しているのに、③版元の方がうまく適応できないでいる、といったことか。確かに実感としても、自分の作る本を一体どういう人が読むのだろう、と考える込むことが多い。だから読者の核になる人々の関心の変化をつかめば、打開の途は拓けることになる。とはいってもここから先は実際

に本を作ってみなければならぬ。書店に並べてみなければならぬ。売れて始めて変化をつかんだことになる、そんな手探りの状態だと思ふ。

尤も関心が奈辺にあるかの指標が全くない訳ではなく、人文書の中味に関わる学問情況の変動に注意してみれば、売れるであろうそれなりの分野は浮んでくる。例えば、記号論や社会史、女性学などは当然そうした分野である。しかしそれも試行錯誤であるのは避けがたく、その意味では、流行に乗り遅れないために、といった安易な安定指向ではやけどをするのがオチである。

中味がそんな具合だから、装幀もやってみなければ分らないところがある。

ところで昨年、ある大型書店にお願いして勲草書房の装幀について店員さんの印象をまとめてもらったことがあった。大半は古い、ダサイ、地味だ、といった否定的印象を述べていた。肯定的には、落ち着いている、格調が高いなどというのもあったが、これはなぐさめ程度ととるべきだろう。勲草書房はもともと法律書から出発しているところから、函入りの固いイメージをよしとする考えも強い。社内だけでなく、人文書の著者（多くは学者）にもその傾向がある。著者の中には、最近の風潮を苦々しく思っている人も多く、そういう人に本の売れない現状から順々に説いて納得させるのも編集者の大事な仕事になってきた。

函入りといえば、先の書店で、身体論をテーマにした本を数えたところ54点あり、うち函入りは4点、そのまた1点が勲草書房の本であった。記号論関係では、43点中、函入りは1点、それが勲草書房ノ。ことほど左様に人文書はカバー装が主流である。読者が函か

ら出すのを面倒がるという話を聞いて驚ろいたのは大分昔だが、この時は更に若い店員さんの、装幀の悪い本はすぐ返品したいという話を聞かされてショックだった。「人文会ニュース」33号で書店の方が書いている「『装幀が良くない』『二段組で活字が小さい』という理由で、手にした本を戻してしまう」という読者の行動に見合った書店の側の本首だろうと思う。

勲草書房の本も人文書に関しては、カバー装にすることがほぼ定着してきた。それにしてもいい装幀とは何だろう。いわゆるプレグナンツの法則でも織り込んでおしゃべりするのも一興だが、一義的に答えるのは不可能に近い。そこで少し角度を変えて考えてみる。店頭に並べ読者との接点を確保することを考えて装幀の機能をぎりぎりに絞れば、目立つこと、の一言につきる。目立つとは、他と画然と区別されることをいう。デザインを一新しよう、新進鋭鋭の装幀家を起用しよう、思い切って多色刷にしよう。……カンカンガクガクの議論が一巡すると、それらすべてが空しいことが明らかになった。というより、そんなことは初めから分っていた……。勲草

書房クラスで出す人文書は、初版が普通二〜三千部、多くて五千部どまり。印刷費や資材費の値上げ圧力に抗して、どうやってコストダウンをはかるかに腐心しているとき、大きな危険を冒して装幀に金をかけるわけにはいかない。プロの装幀家に依頼したり、専属の装幀者を社内を抱え込んだりすることはおろか、オフセット印刷の使用も部数の関係でほとんど出来ないでいる。目立つことをまっとうに考えることは、こうして所詮思考実験にとどまったまま終った。

では、金をかけずに簡単で、しかも見た目はきれいに仕上げるにはどうすればいいか。結局、カバー装で白地に黒文字を原則とすることになった。それに耐久性を考えてビニールをかけること。この装幀は珍しくも何ともない。勲草書房にもあったし、他社でもごくありふれた装幀である。しかし意識的に揃えていこうとするとところが勲草書房にとって多少新しかった。みず書房や晶文社、一寸違うが最近の人文書院のやり方である。色の洪水の中では、白と黒という単純な組合せが結構目立つのである。また仕上りのスマートさ

という点で先の三社には定評がある。

白地に黒文字、色刷のカット一つ、それに従来はなかなか使いにくかった派手なおビ、これで装幀は出来上りである。とはいうもののカットを何にするか、色の組合せをどうするかで無いセンスを絞るのはかなりつらい。本文の校了が近づき、さて装幀の番だとなると、三日ぐらいは歩いていてもトイレにいてもヒントを探していることが多い。私の場合、原則が決ってから十点近くやったが、人様にもまあまあだといってもらえたのは二、三点しかない。

それでも方向を決めて続けてきた効果はあった、と私は思っている。昨年五月の『パースの記号学』あたりから注目され始め、書店から勤草書房は変わった、とはっきりいわれるようになったのは秋頃からだろうか。その後少数のA5判の本も思い切ってカバー装にしてみたり、オビの文字を大きく字数を少なくしたりの細かな改良も進めている。ただ、これまで書店や読者にアピールしたのは、従来の勤草書房にない目新しさが受けただけかも知れないという不安が、いつも残る。目新しさが消えた時、あるいは早晩陥るマンネリ

化の後をどうするか。実はそこまでは考えていないのだが、結局は中味が勝負ということになるのだろうか。

買われた後のカバーについて

一読者としての経験からいって、本を買った後のカバーとおビは、実は困りものだ。そのまま本を開くとズレたりはずれたりし易い。立ったまま、例えば、電車の吊革につかまって読もうとするとかなり意識的におさえなければならぬ。面倒なので、普通はカバーをはずして読む。買うとすぐカバーは捨ててしまふ、という読者もいる。町の図書館など近頃は、カバーの上からのりつきビニールをビタッと貼りつけてズレないようにしているが（それでもおビはしばしばはずされている）、大学の図書館などは、カバーもおビもとってあるところが多い。苦心して装幀したカバーが無造作にはずされ、丸裸にされた本に出会うと「おお、お前も苦労しているな」と声を掛けてやりたくなる。売るためにつけたものだから、買われてしまえば用済みともいえる。だが、カバーは単なる包み紙ではないと思う。

勤草書房では、カバー装の本には両袖のビニールをつけている。前に述べたように、これはまず第一に耐久性を考えてのことだが、一点ごとのオーダーメイドだから、立ったまま本を開いても簡単にはずれない。その限り読者はわずらわしさを多少解放されるし、カバーも本体も汚れなくて済む。電車の中でみていると、多くの人は書店の包装紙をつけたままか、カバーをわざわざ裏返してつけ直している。衆人環視の中で目立つ装幀の本を開くのは抵抗があるということの他に、読み終って書架に並べるときには、きれいなカバーのままにしておきたいということであろう。実際、本はカバーもおビも込みで一冊だ。図書館にも、カバーはやはりかけたままにしておいて欲しいと思う。しかし、そういえるためには本を「使う」読者の身になって、更に一層の工夫があるだろう。売るための装幀からは逸脱するが、いずれ考えてみたいと思っている。

東京堂書店建て替え オープンにあたって

弊東京堂書店では昨年六月以来神田すずらん通りに本店建て替え工事を進めておりましたが、工事は極めて順調に進み、十月十五日には予定通り開店できる見込みであります。これひとえに業界の方々をはじめ近隣その他各方面のご理解とご協力のお蔭と存じ厚く御礼申し上げます。このたび人文会幹事の方からのご依頼がありましたので新店計画に関する私共の考え方・取組み方などについて少々述べさせていただきます。

旧建物は昭和四年の建築で戦災には焼け残りまして五十年余りを経過しておりました。

三省堂書店と並んで、神田村の名物、東京堂書店が来る十月十五日にオープン致します。専門書版元の期待の星として腹藏なく、抱負と方向を語っていただきました。開店準備に忙殺されている時に、貴重な時間を割いて原稿を下さり、ありがとうございます。読書人を大切にされる、東京堂書店の姿勢は多くの方々の支持を得られると確信しています。

開店おめでとうございます！

東京堂書店
常務取締役

澄 田 譲

何せ木造建築なので、この間何度か手を入れではおりましたが既に寿命を遙かに超えておりまして、万一お客様に事故でもあってはそれこそ大変と日々案じておったものであります。加えて此の度地下鉄十一号線（渋谷―半蔵門―神保町―三越前）が地下二十六米とはいえ、敷地の直下を貫通することとなりましたのでこの際耐久建物にすることが必要でありました。それが建て替える第一の理由であります。

〈東京堂の歴史と建物〉

ここ神保町は東京堂の発祥の地でありま

す。明治二十三年（一八九〇年）この地で書籍・雑誌の小売店を創業いたし、また翌年から取次業を併営いたしました。取次業についてはその後大正・昭和と次第に拡大発展し、やがて全国的規模となり、取次東京堂として出版界にその存在を認められるようになりましたが、昭和十七年戦時企業整備令によって、全取次店を一元化した配給会社、日本出版配給会社が設立されて、東京堂の社員四三〇名と営業権を無償にて統合されました。しかし小売店は創業以来ここ神保町すずらん通りで営業を続けているものであります。東京

堂の神保町の建物は創業以来震災を含めて三度も大火に罹災して、五回の建て替えをしております。明治二十五年(大火)、四十四年、大正二年(大火)、大正十二年(震災)、昭和四年、であります。大正二年に建てたものは三階建て当時東京でも名物になったと言われております。

〈神保町周辺〉

昔から本の街として永い伝統をもつ神田神保町に最近スポーツ用品の店が急速に増え、若い人で賑わって来ております。このところ、三省堂さんが、続いて東京堂が建て替えというところで、大変な激戦地であるとか、書店大型化戦争であるとか言われております。しかし何れも建物の寿命が来て建て替えたものであります。数年前、某大型店で不幸な長期ストがあったとき近隣店で多少の売上増はあったも神保町地区全体では地盤沈下してしまいました。引続いて三省堂さんの工事でした。神保町の灯を消すなど私共は営業を続けましたが、微力にして三省堂さんのお客様の足を神保町地区に留めることは出来ませんでした。それは売上げが前年比微増であったことで明白です。街全体として見れば大変な地盤沈下

であったわけです。現在三省堂さんが新装大型化して開店したことによって街全体の新聞のお客は旧店時代に比べ推測ですが三割は増えていると思います。東京堂もこれに加わって、昔ながらの本の街として神保町地区を更に魅力のある地区にしたいと思っております。

〈新神田本店の概要〉

- ・名称 東京堂神保町第一ビル
- ・所在地 千代田区神田神保町一ノ一七
- ・構造 鉄筋コンクリート造
- ・面積 敷地面積 四七四㎡
- ・設備 延床面積 二五八〇㎡
- ・設備 昇降機三台、エスカレーター(一ノ六階)上り
- ・開店 昭和五十七年十月十五日
- ・店舗面積 和書 一七二〇㎡(五二〇坪) 洋書 一六五㎡(五〇坪)
- ・名称 東京堂神保町第二ビル
- ・所在地 千代田区神田神保町一ノ二七
- ・構造 鉄筋コンクリート造
- ・面積 敷地面積 四四〇㎡

延床面積 二〇〇〇㎡

・用途 一階、書店外商部及びガレージ

二階、書店事務所他

三階以上貸ビル

〈最後の大型店〉

昨年の日販さんの書店経営指標によりますと、比較的上の部に入る年商一〇億円以上の二二店の売上純利益率が一・四八%であります。すなわち一〇億円売上げて年間一四八〇万円の税引前利益です。しかもこれなどは建物なども古くほとんど償却負担の少ない店での統計です。経費負担の高い、償却費負担の高い店では余程の効率を上げ得る立地でないとして赤字は間違いありません。書店は立地が九〇%と言われる位ですからそんな立地のよい所には土地はありませんし、その上、建築投資をしても経費負担に耐えられるものはありません。それでは借り物ではどうか。借り物として同じことで地価、建設費の高騰から一流立地の地下街など保証金だけで坪当たり五〇〇万円もしています。家賃も坪月三万五千円とか、たとえ超一流の立地としても無理でしょう。したがってSDやデパート内の三〇〇坪位の店ではできても、五〇〇坪を超える

專業大型書店はもうできないと思います。したがって私共は最後の大型店と思って店づくりをしたいと考えております。

〈複合専門書店〉

流通書籍を可能な限り網羅しているといわれている日本書籍総目録の本年度版には二九八、〇六五点の書籍が掲載されております。又雑誌は二、五五七誌といわれておりますから併せて三〇万六千点を超えるわけです。一方大型書店の展示能力としては平均一坪当り五〇〇冊ですから全点を展示するためには六〇〇坪の店が必要であります。又全点一冊宛展示というわけには参りません。二冊置くもの、三冊置くもの又平積しておくものもあり、冊数と点数の割合は一对〇・五位ですから店舗坪数としては一、二〇〇坪を必要といたします。そこで和書五二〇坪で営業する私共としてはいろいろと工夫して書籍一六万点、雑誌一六〇〇誌を揃えることを目標としております。これは大型店といわれる他のお店に比べ遜色のないものと思っております。しかし全流通点数の六〇%弱の本しか置けないのですから広く浅くという中途半端な総合書店でなく特定の分野の品揃えに絞って特

色のある店、複合専門店とでも申しませうか、それが私共の目指す店づくりであります。

〈読書人の東京堂書店〉

読書人は当社が取次廃止後発行した書評雑誌で読書家本位に徹していました。読書人の題号は昭和三十三年書協に引き継がれました。ここという読書人はお客様の中で特に書物を読みたいという熱心なタイプの人を行います。このタイプの人は読書に目的意識・問題意識をもっております。マスプロ化された時代にあっても本当の本好きの人は存在するものであります。年齢には関わりありません。画一化されたものに満足しない自由の精神の持ち主、すなわちオピニオンリーダーと申しませうか、マスとはなり得ない個性的・研究的読書人と申しませうか。私共としてはそういう方々を固定客として、これに応えていける店づくりをしようと思っております。したがってキャッチフレーズとして「読書人の東京堂書店」でいくつもりでございます。私共は包装紙にフクローのデザインを使っております。五十年位前からだと聞いております。今度もビルの前面外壁の四ヶ所にフ

クローのデザインをマークとして取付けました。包装紙にもブックカバーにも取入れて使って参ります。フクローは知恵を司る女神の象徴、知恵の泉のシンボルとして採用されたと伝えられております。読書人と知識の象徴フクローの東京堂書店、東京堂は昔ながらの硬い本屋でやっています。そして最後の大型書店に課せられた使命と思って専門書の着駅を目指します。

〈文化サロン〉

六階に約二〇坪、私共にとっては少々豪華な一部屋をつくりました。名付けて文化サロン、談話コーナーや、講座テーブルを備え付けました。一隅にホームバーカウンターを設けワゴンサービスが出来ます。用途は講座、サイン会、展示、催物場であります。版元さんの著者を交えた企画会議などにも最適かと思っております。ここで識者の書評などを発表していただくとか、作家の後日談などを語っていただき機関紙「読書人」などを発行して読者サービスができれば文化に貢献という意味からも最高と思いますが、本業以外のことには不器用な社風ですから果して実現できるかどうか疑問です。

へコンピューターで

店売バックアップシステム

選びやすい店、探しやすい店づくりを目指すとしても展示点数が多くなればなる程読者にとっては本を探す時間のロスが多くなります。又係員にとっても商品管理がむづかしくなります。このため当店ではコンピューターによる店売バックアップシステムを考案いたしました。お客様に対しては一階入口にコンピューターレファレンスコーナーを設けて、書名検索をブラウソ管を通してサービスいたします。これは当社独特のシステムで、本年発行の新聞についてはすべて入力して、探す新聞が在るか無いか、在れば何階の何処に在るかを表示いたします。商品管理では、新聞については総て単品管理で、その他については分野ごと、出版社ごとのグループ管理を行います。したがって注文指令もコンピューターに表示され、客注も入力しておきますし、売上スリップの分析も出版社ごとに表示されるようシステムを組んでおります。

店づくり準備のための一ケ年間はアッという間に経過いたしました。十月十五日の開店まで余ところ二ヶ月、只今各版元さんに対

する出品依頼の業務に追われています。刊行会目録に掲載されているものは全点展示したいと思っており、出品依頼は単品名でなく、出版社ごと、分野ごとの所要点数でお願いする形をとり、版元さんのご協力を頼りとして店づくりをしたいと思っておりますので、よろしくご支援ご協力をお願いいたします。幸いビル竣工から開店まで一ヶ月の余裕がありますので、この間に開店に向けて総仕上げをして、皆様のご期待に沿いたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。



中平杯争奪

第11回人文会ゴルフ・コンペ

七月十三日高坂カントリークラブ米山コースにて取次店様六名・会員社十三名が参加して親睦ゴルフ・コンペを開催いたしました。心配された空模様もくもり・無風その上芝生は最良と絶好の条件のもと各人思い思いのうちスタートしました。日頃人文書販売には精通されている各氏もいざ自身のゴルフボールの行方は予測つきがたく苦戦のよう。そのなかで同コースをお世話いただきました明文図書関通夫社長が実力を遺憾なく発揮されめでたく中平杯を掌中に収められました。多士済済を誇る当会ゴルフ・コンペでは実力はもちろんのこと、あらゆる面での鍛練さを感じつつ報告とさせていただきます。

尚上位入賞者は次のとおりです。

優勝 関通夫（明文図書）

準優勝 相田良雄（みすず書房）

3位 渡辺昭（日販）

4位 市川昭夫（法政大学出版局）

5位 新部二郎（東京大学出版会）

第十一回幹事・市川

〈人文書講座〉 1

記号論とは

何だろうか

今号より四回にわたり〈人文書講座〉と称して、書店で注目していただきたいジャンルを取り上げて、わかりやすく解説し、商品知識や棚揃えの参考になるような企画を予定しています。七月まで弘報委のメンバーの野口謙氏（現紀伊國屋書店・新湯店）の発想です。次回より「神秘学」「文化人類学」等を取り上げる予定です。ご期待下さい。

弘報委員会

紀伊國屋書店
出版部 渦岡謙一

最近、記号論がはやっているという。都内の大書店でも、記号論に関するコーナーが目につくようになった。紀伊國屋書店で今年の二月に行なったブックフェアも予想以上の好評で、フェア期間が終わった現在もそのコーナーは続けられている。現代思想のユニークなコーナーとして少なからず注目されているようだ。

記号論関係の書物が一般に注目されるようになったのは、ここ二、三年のことではないか。タイトルではつきり分かるものだけでなく、U・エーコ『記号論』（岩波書店）、山口昌男編『説き語り 記号論』（日本ブリタニカ）、

竹内芳郎『文化の理論のために——文化記号論への道』（岩波書店）、米盛精二『バーズの記号論』（勤草書房）、シービオク『シャロック・ホームズの記号論』（岩波書店）、桑野隆『民衆文化の記号学』（東海大学出版会）などがあり、急に点数がふえてきたようだ。また、日本記号学会が発足して、機関誌『記号学研究』（北斗出版）が二号まで出ている。

このように広く注目されはじめたのは何故か。その魅力はどこにあるのか。そもそも記号論とは何かが問題になるが、それに答えるのは容易でない。「日本には記号論学者の数

だけ記号論がある」（丸山圭三郎）のだから、ここでは気楽に、われわれ、つまり素人にとつて「記号論とは何か」ということを考えてみたい。

ここで記号論という名称について一言。記号論には別に、記号学という呼び方もある。それぞれ、セミオロジー、セミオティクスの訳語だという。その学問的背景はいざしらず、私の好みとして、やはり、記号「学」ではなく、記号「論」の方をとりたい。宇宙論などと同様、そこには「学」にとりこまれて専門化することを拒み、あらゆる人々に開かれたものが感じられるからだ。どちらを使う

かによって、その人の記号論(学)に対する考え方が分かるといったら、暴言にすぎないだろうか。

さて、記号論とは何か。エーコの『記号論』の最初の方に、「記号論とは原則的に言えば、「嘘を言うために利用しうるあらゆるものを研究する学問である」という卓抜の定義がある。定義というものは、それだけで当の概念の意味が分かるというものではなく、その定義に違反するものの考察を通してはじめて、その意味するところが明らかにするものであろう。だから、この定義も当然、嘘をつくことのできるあらゆるものについての考察と同時に、真実しか言うことのできないものとは何だろう、それは本当に真理をのべているのだろうか、という考察にわれわれを誘うことになる。

そして(ここで急に独断的になるのだが)、この真実のみをめざそうとしているのが、近代科学の思考法と考えていいのではないかと。つまり、「一つの言葉には、理想的に言えば、一つの意味が対応して、そうした言葉を集積すると世界が何であるかが分かるという楽観的な静的な意味論的な世界の捉え方」

(山口昌男)である。そういう世界の捉え方に対して、世界はそんなに簡単に捉えられるものではない。もつと多様で、動的で、「どこでどうつながっているか分からないもの」である。それをさぐるには、三段論法、帰納法、演繹法などの科学の論理ではなく、アナロジーの論理が必要である。記号論は、予想外のものを結びつけて、そこにいままで見えなかった効果を出現させる、「詩学」の方法に依拠しているといえよう。

われわれは、生まれてこの方、社会教育、学校教育を通して、外見、印象、形式よりは物、実体、内容という考え方をたたき込まれてきた。しかし、内容とか実体というものはアプリオリに存在するのか。むしろ、それらは形や現象を通して存在するのであり、形、現象の差違性、関係性の中にしか存在しないのではないかと、と記号論は主張しているように思われる。そこには、明らかに現実に対する異なった態度がみられる。実体としての一義的な現実ではなく、われわれのまなざしに捉えられたかぎりでの、多義的な、「記号」としての現実である。

因果論的、効用主義的、客観的に現実をみ

ようとする近代科学の方法は見事な成功をおさめた。人文科学、社会科学の中にも、この方法に学び、科学をめざす学問が多い。そのような学問の潮流の中で、記号論は敢然と違った現実への見方を主張しているといえよう。「当り前のものとしてわれわれのまわりを支配している現実を構成するシステムに疑いを向け、当り前と思われるものの底にうごめく魑魅魍魎を解放し、世界を捉えなおすための根元的な知の再検討の運動」(山口昌男)というわけだ。

このような記号論の運動に対して、「記号論は現実を解釈(解説)するだけで、変革しようとしなない。それは、現実をそのままに、その意味のみを「読み換える」という、知的な遊びである」と批判する人々がある。しかし、そういう人々は、まず現実というものをどう考えているのであろう。現実とは、その時代の人々が共有する「共同幻想」にすぎないという見方もあるが……。また、解説することなしに変革もないのではないかと。ものの見方が変わるということは一つの自己変革であり、現実の変革ともいえるのではないかと。世界は自己とまわりとの関係でしかないとし

たら。

そしてなにより、「知的遊び」のどこが悪いのだろう。むしろ、従来の学問には余りにも遊びが欠けていたことを反省すべきではなからうか。「遊びは何かイメージを心のなかで操ることから始まるのであり、つまり、現実を、いきいきと活動している生の各種の形式に置き換え、その置換作用によって一種現実の形象化を行ない、現実のイメージを生み出すということ」が基礎になっている、とホイジンガーはいつている。学問を狭い専門分野の中に閉じ込めるのでなければ、遊びの要素は必ずしも必要であらう。

そういう点からも、都市、映画、マンガ、プロレス、相撲などにアプローチできるのは、いまのところ記号論以外に見当らない。人間の文化を、一個のテキストとして、遊びの相をも含めて、その複雑な魅力を失うことなく扱うことが、いま求められている。こういう、従来の学問の対象にならない分野を扱うとき、記号論の面白さが最も実感されるように思われる。

さらに、山口昌男氏の「中心と周縁」理論でいうと、中心しか対象にしない従来の「知

に対して、文化を活性化するものとしての、周縁、カオス、いかがわしいものの、に関心をもっているのが記号論であらう。そこでは当然、狂気、夢、異文化、子ども等、われわれの支配的価値観、世界観をおびやかすものを対象とする、精神医学、精神分析、文化人類学、児童学等との問題意識が共有されよう。

以上、独断と偏見のみに頼って、「私の記号論」を考えてきたが、このように多様な関心をもつ記号論を、書店が取り入れることはどのようにして可能なのであらう。哲学、歴史、政治学、社会学、経済学……等という従来の分類に記号論はもはや入りきらないのではないか。ブックフェアとして一時的に集めることには意味があるかもしれないが、いまや読者の関心は書店の分類を追い越していることは確実であらう。

分類することは分かることであり、世界に対する見方の一つの表現であるとしたら、「すべての書物を集める」ことを目ざすよりも(そういう書店もあるが)、いかに書物を分類するかが、書店の魅力を決定するのではないか。この困難な作業を再検討することが、売れないと言われる人文書の今後のため

にも必要なことと思われる。編集者としても、意図的に、従来の知の分類を越えたところに活路を見出そうとしているのだから。

最後に、簡単に文献リストを列記します。記号論関係書の品揃えに参考になれば幸いです。

『言語学を含む一般記号論』 丸山圭三郎

『ソシュールの思想』(岩波書店)は、弟子たちによって編まれた『一般言語学講義』(岩波書店)の誤りを逐一チェックして、ソシュールが記号論によって意図したところを生きいきと描いた力作。P・ギロー『記号論』(白水社)、手取り早く記号論の概念を知るために。山口昌男編『説き語り 記号論』、第七刷までいつているという。いろいろの人が記号論の魅力を語っている。佐藤信夫『記号人間』(大修館書店)、『レトリック感覚』、『レトリック認識』(講談社)、人間は記号なしに生きられないこと、忘れられたレトリックの復権を、分かり易くかつ面白く主張。R・ヤコブソン『一般言語学』(みすず書房)、失語症と関連させて言語の二機能を論じた所は特に面白い。吉本隆明『言語にとって美とはなにか』(勁草書房)などもここに入れては

どうか。

《文化記号論》 ダイナミックな記号論によって現代の文化を解説しようとする、山口昌男のほとんどの著作。栗本慎一郎『幻想としての経済』（青土社）、ものを扱う経済学に記号の視点を導入し、人間の暗い深層をかいまみせた力作。同著者の処女作『経済人類学』（東洋経済新報社）も面白い。海野弘『地下都市への旅』（青土社）、『空間のフォークロア』（駿々堂）、『都市の神話学』（フィルムアート）。レヴィーストロース『構造人類学』『野生の思考』（みすず書房）。E・リーチ『文化とコミュニケーション』（紀伊國屋書店）、構造人類学と記号論について明快に説いた、最適の入門書。ボードリアール『消費社会の神話と構造』（紀伊國屋書店）、『物の体系』（法政大学出版局）、生産にかえて消費の視点を導入して新鮮。

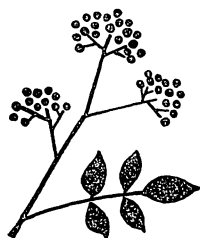
《映画・音楽・美術・都市》 R・バルト『映像の修辞学』（朝日出版）。ブーイサク『サーカス』（せりか書房）。細川周平『音楽の記号論』『ウォークマンの修辞学』（朝日出版）。榎文彦『見えがくれする都市』（鹿島出版会）。村松友視の「プロレスの味方」三部作。

《文学関係》 R・バルト『文学の記号学』『テクストの快楽』（みすず書房）他。S・ソントグ『反解釈』（竹内書店）、『写真論』（晶文社）。柄谷行人『意味という病』（河出書房）。川本三郎『走れナフタリン少年』（北宋社）、ユニークな少年文学論。三浦雅士『私という現象』（冬樹社）、知的興奮をおぼえる。種村季弘『べてん師列伝』（青土社）、うそをつくこと、だまされることの根源的意味を考えさせる。

《身体・遊び・夢・子ども》 中村雄二郎『共通感覚論』『感性の覚醒』（岩波書店）、『パトスの知』（筑摩書房）。市川浩『精神としての身体』（勁草書房）。多木浩二『眼の隠喩』（青土社）。モリス『マン・ウォッチング』（小学館）、『ジェ・スチャール』（日本ブリタニカ）。W・ラム『ボディ・コード』（紀伊國屋書店）。ベンヤミン『教育としての遊び』（晶文社）。渋谷竜彦、種村季弘、バシユラル、ユング、フロイトのものすべて。秋山さと子『子どもの深層』（海鳴社）。本田和子『子どもたちのいる宇宙』（三省堂）、『異文化としての子ども』（紀伊國屋書店）、児童学方面で唯一、面白い人。別役実『犯罪症候群』（三省

堂）、最高に面白い。

《歴史記号論》 阿部謹也、大室幹雄、樺山紘一、網野善彦、M・フーコーなどのもの。そして最後に、才媛J・クリステヴァ『中国の女たち』（せりか書房）。



法政大学出版局	耳証人—新人さま さま	エリアス・カネッティ 岩田行一訳	四六	1,400円
	旅路の果てに	ロジェ・カイヨワ 金井裕訳	//	1,600円
	心霊現象の心理と 病理	C. G. ユング 宇野昌人他訳	//	1,300円
	物の体系	J. ボードリヤル 宇波彰訳	//	2,200円
	論理哲学論考	L. ヴィトゲンシュタイン 藤本隆志他訳	//	1,800円
みすず書房	人は獣に及ばず	中野好夫	B 6	1,900円
	夜と霧	フランクフル	//	1,300円
	生きがいについて	神谷美恵子	//	1,100円
	分裂病の少女の手記	セシュエー	//	950円
	こころの旅	神谷美恵子	//	1,300円
未 来 社	神田川	朝日新聞社会部	四六	1,200円
	風流魚譚	佐藤魚水	//	1,500円
	インドとまじわる	荒松雄	//	1,800円
	現代政治の思想と 行動	丸山真男	A 5	2,500円
	軍靴の音よさらば	清水鶴子	四六	1,300円
有 斐 閣	昭和史	金原左門他	四六	1,900円
	東南アジア現代史	滝川勉他	//	1,700円
	アメリカの女子教育	大柴衛	//	1,100円
	社会学小辞典	浜島朗他	//	2,400円
	社会福祉の法と行 財政	仲村優一他	A 5	3,500円
吉 川 弘 文 館	日本考古学概論	斎藤忠	//	3,800円
	座の研究（豊田武 著作集 1）	豊田武	//	6,800円
	中世の武士団 （" 6 ）	//	//	7,200円
	家元の研究（西山 松之助著作集 1）	西山松之助	//	7,800円
	仏像案内	佐和隆研編	四六	1,500円

	ことばと空間	牧 野 成 一	〃	1,600円
	伝記文学の誕生	A. モミリアーノ 柳 沼 重 剛訳	〃	2,200円
東京創元社	自由からの逃走	E. フ ロ ム	四六	1,200円
	脱学校の社会	イヴァン・ イリッチ	〃	1,100円
	夢の精神分析	E. フ ロ ム	〃	1,300円
	人間に於ける自由	〃	〃	1,500円
	バルスーム	リチャード・ ルポフ	〃	1,900円

東京大学出版会

	中国近現代史（上・下）	姫 田 光 義他	〃	各1,800円
	インド思想史	早 島 鏡 正他	A 5	3,000円
	比較文化叢書 2 巻 文化と協応	中 田 光 雄	四六	1,800円
〃	4 巻 日本のメタファー	赤祖父 哲 二	〃	1,800円
〃	5 巻 日本留学と革命運動	上垣外 憲 一	〃	1,800円

日本評論社	日本企業の海外進出	北 沢 洋 子	A 5	2,000円
	西洋学事始	樺 山 紘 一	菊	2,800円
	松沢病院外史	金 子 嗣 郎	四六	1,800円
	非戦のうた	高 崎 隆 治	〃	1,300円
	軍縮と平和への構想	鴨 武 彦	〃	1,700円

福 村 出 版	手話を学ぼう短文篇	中 野 善 達他	〃	1,300円
	狼に育てられた子	シ ン グ	〃	1,000円
	新訳アヴェロンの野生児	イ タ ー ル	〃	1,000円
	結婚の心理	国 分 康 孝	〃	1,200円
	障害児に学ぶ	伊 藤 隆 二	〃	1,500円

平 凡 社	中世イタリア商人の世界	清 水 廣一郎	A 5 変	1,800円
	路地裏の大英帝国	角 山 北 榮 穂編	〃	1,700円
	中世の再発見	網 野 善 彦也 阿 部 蘆 也	四六	1,500円
	アリラン峠の旅人たち	安 宇 植 訳	A 5 変	1,800円
	子供たちの大正時代	古 島 敏 雄	〃	1,800円

	奇妙な論理	M. ガードナー	四六	1,500円
	アトミックソルジャー	H. L. ローゼンバーグ	〃	1,300円
晶 文 社	小児病棟の子どもたち	向 井 承 子	〃	1,200円
	子供の文化人類学	原 ひ ろ 子	〃	980円
	写真論	スーザン・ソントグ	〃	1,300円
	脱病院化社会	イヴァン・イリッチ	〃	1,500円
	トリックスター	ラディン, ケレニーイ, ユング	A 5	1,800円
春 秋 社	どんな子ども捨てられない	若 林 繁 太	四六	1,300円
	ゲオポリティク入門	倉 前 盛 通	〃	1,500円
	かぼちゃ和尚の只管打坐	吉 田 興 山	〃	1,300円
	モーリヤック著作集 1	遠 藤 周 作	〃	3,200円
	日本の景観	樋 口 忠 彦	〃	1,600円
誠 信 書 房	自我同一性	E. H. エリックソン 小此木 啓 著訳	A 5	2,500円
	カウンセリングの実際問題	河 合 隼 雄	〃	2,000円
	子どもの目から見た世界	M. サイム 星 三 和 子訳	〃	2,000円
	誠信心理学辞典	外 林 大 作 他	B 6	3,800円
	完全なる人間	A. H. マスロー 上 田 吉 一訳	四六	2,000円
筑 摩 書 房	いくさ世を生きて	真 尾 悦 子	四六	1,200円
	いのちの優しさ	高 史 明	〃	1,200円
	十牛図	上 柳 関 黒 出	〃	2,200円
	「ガロ」編集長	長 井 勝 一	〃	950円
	教育の再生をもとめて	林 竹 二	〃	1,300円
東海大学出版会	新音楽史	H. M. ミラー 村井・松前・佐藤訳	A 5	1,200円
	地方の時代	磯 村 英 一	B 6	1,500円
	都市問題の系譜	磯 村 英 一	〃	1,800円

会員社ベスト5 (6月—8月より)

社 名	書 名	著者名	判型	定価
青 木 書 店	太平洋戦争史論	藤 原 彰	四六	1,600円
	地球人としての哲学	高 田 求	〃	1,200円
	百人一首の秘密	林 直 道	〃	1,400円
	耕せ耕せばくらのからだ	高 田 敏 幸	〃	1,300円
	さくら, さくらんぼの障害児保育	斎 藤 公 子	〃	1,800円
大 月 書 店	食生活と健康	日本科学者会議	〃	1,300円
	ジャーナリストの原点	綾 戸 又 一 岡 崎 万 寿 秀	〃	1,400円
	子どもの発達と診断 1	田 中 昌 人 杉 人 恵	B 5 変	2,000円
	税関最前線	税関問題研究会	四六	1,400円
	女の生きかた	郷 静 子	〃	1,200円
紀伊國屋書店	手と脳	久 保 田 競	四六	1,700円
	愛するということ	エーリッヒ・フロム 懸 田 克 朗 訳	四六	800円
	異文化としての子ども	本 田 和 子	四六	1,800円
	元 型 論	C. G. ユング 林 道 義 訳	〃	2,200円
	心と分子メカニズム	大 木 幸 介	〃	1,800円
勁 草 書 房				
	講座記号論 1 言語学から記号論へ	川 本 茂 雄 他	A 5	2,700円
	〃 2 記号を哲学する	〃	A 5	2,700円
	〃 3 記号としての芸術	〃	A 5	2,700円
	現代美学双書 3 象徴と記号	浅 沼 圭 司	四六	1,800円
	パースの記号学	米 盛 裕 二	〃	2,100円
社 会 思 想 社	菊と刀	R. ベネディクト	B 6	1,200円
	ギリシャ神話	山 室 静	四六	1,500円
	三六五日事典	社 会 思 想 社	B 6	1,800円

人文会会員名簿

(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

57. 8. 5現在

	社 名	担当者	☎番号	所 在 地	電 話
幹 事	青 木 書 店	山根 襄	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651
	紀伊国屋書店	佐久間健雄	102	千代田区五番町12 ドミール五番町	263-9006
休 会 中	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽2-23-15	814-6861
	現 代 思 潮 社	安藤 豊	112	文京区小日向1-24-8	943-4406
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105
幹 事	春 秋 社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4502
	誠 信 書 房	浜地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 東海ビル	356-1541
会 長	東 京 創 元 社	星野 治吉	162	新宿区新小川町1-5	268-8231
	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111 内7955
	〃	佐々木貞次	〃	〃	811-2157
	日 本 評 論 社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161
	福 村 出 版	福村 惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981
	平 凡 社	丸山 正実	102	千代田区三番町5 Kビル	265-0455
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	106	港区南麻布2-8-4	453-0717
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131
幹 事	未 来 社	石井奈良彦	112	文京区小石川3-7-2	814-5521
	有 斐 閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811
	吉 川 弘 文 館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151

販売委員会 ◎浜地 氏家 篠崎 佐藤 星野 岡田

弘報委員会 ◎神田 後藤 原田 佐久間 菊池

調査・企画委員会 ◎萬洲 川越 渡辺 竹内 丸山

◎印は委員長

★ジャーナリスト、研究者18人の異色の共同討論！

ジャーナリストの原点

城戸又一・岡崎万寿秀編 ●絶賛発売中

●目次 戦争とジャーナリスト／二つの選択、二つのジャーナリズム／「新聞が死んだ日」そして「テレビ時代」を考える／わが体験的雑誌戦後史／出版危機の流れのなかで／現代と向かうジャーナリスト／創造する人民的ジャーナリズム

●参加者 三の洋雄 仲三介 雄夫 信一 典良
森井孝貞 井浦総 安江能英 太 勝 典 良
新高橋孝貞 青木井松 安江能英 太 勝 典 良
隅井孝貞 青木井松 安江能英 太 勝 典 良
清水美作 岩切本 高木教典 三上正良
紺野純一
46判カバー
定価1400円

東京都文京区
本郷2-11-9

大月書店

電話 03 (813) 4651 (代表)

さあ、人間の出番だ

日本の活路
を考える

都留重人 校廃絶、環境問題、医療、エネルギー、都市問題など、日本の進むべき道を大胆に提言する。一五〇〇円 千250

言語学から記号論へ

講座・記号論①

川本茂雄他編 言語学と記号論の関連、各国別記号論の展開、そして言語芸術の現在を解く。へ内容見本呈 二七〇〇円 千300

北村透谷 原像と水脈

小沢勝美 自由民権運動時代の「富士山遊び」の記憶、師秋山国三郎との交流等にある透谷文学の源泉。二一〇〇円 千250

墨子を読む

駒田信二 儒家に対抗し、「非戦」を説き「兼愛」を説く墨家の思想こそ、現代人のふりかえるべき原点。一九〇〇円 千250

東京文京 後深2-23 勁草書房 振替東京 5-175253

異文化としての子ども

1800円

本田 和子 子どもとは何か。我々の偏見のままだしから解き放つたとき、子どもはどのように立ち現われてくるか。記号論的に子どもを読み解く試み。

時制論

文学テクストの分析

6500円

H・ヴァインリヒ／協阪豊他訳 西欧の現代諸言語で書かれた文学テクストの実例をあげて、時間と時制の問題を詳述したテクスト文法の古典的な名著。

進化と革命

3300円

ウエルトヘイム／清水元、川勝平太訳 社会の進化と革命を軸に生物学モデルに依拠した動態論的社会学を展開し、第三世界論に新たな地平を切り拓く。

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3 (354) 0131

わたしの万葉歌碑

犬養 孝編著 四六判上製・二二〇〇円

アトミックソルジャー

核戦争のモルモットにされた原爆兵士の物語

演30万にのぼる若い兵士が実戦として地獄を体験し、原爆兵士として一九五一年以来、帰国してきえされた戦争演習の恐ろしさに全貌を初めてここに明らかにする。四六判・一三〇〇円
H・ローゼンバウム／中尾ハジメ
ジェフリー・アイリントン／スミス訳

昭和映画世相史

児玉数夫 吉田智恵男 B6判・二三〇〇円

東京文京本郷 社会思想社 03-813-8101

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

小倉玄照著 永平寺講師として6年間を過した著者が、折々に書き綴った好エッセイ集。建て前と本音の相克に悩みつづ生きた雲水生活の哀歓がいっききと描写されている。

永平寺の四季

1600円

国分康孝著 精神分析の性格論と治療論をカウンセリング理論としてアレンジしている。他のカウンセリング諸理論との比較を交えて、著者独特の説得力のある文章で説き語る。

カウンセリングと精神分析

1600円

春秋社

遠藤周作責任編集

全六巻 内容案内呈

モーリヤツク著作集

既刊

第一巻 小説Ⅰ・自伝

三二〇〇円

第二巻 小説Ⅲ・評論Ⅰ

三二〇〇円

次回

第一巻 小説Ⅱ・文学論

士月発売

増刷出来

若林繁太・林勝造・逸見武光

どんな子も捨てられない

—教育の心を語る—

一三〇〇円

東京都千代田区外神田2-18-6 ☎(03)255-9611

なだいなだ全集

全12巻

穏やかな人柄の中に痛烈な批評精神を潜めたボンサンスの人。なだいなだの二五年に渉る著作の全貌！

第1回発売・第12巻

2200円

からみ学入門

わが輩は犬のごときものである

「からみのすすめ」論と、人間と動物の相似・違いを語りながら、諷刺のきいた文明批評を展開する異色作の二編。

■A5判・上製カバー装・毎月一冊刊行・定価各巻不同

筑摩書房

東京神田

小川町2

影の学問、窓の学問

C・ダグラス・ラミス 加地永都子ほか訳
買物文化や女性学、核と平和などを論じて、権威に服従しない開かれた学問への道をさぐる。市民のための新「学問のススメ」1600円

ブダペスト物語

《現代思想の源流をたずねて》 栗本慎一郎
ポランニー兄弟を中心に、革命前夜のハンガリー帝国の首都に集った天才たち。民衆文化がうずまき20世紀初頭の街の精神史。2300円

春の祭典

《ロシア・バレエ団の人々》 藤野幸雄 20世紀初頭のロシア・ルネッサンスの頂点に花開いたロシア・バレエ団。団長のジャーギレフをはじめ9人の中心人物たちの伝記。2300円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

東海大学出版会

異文化と コミュニケーション

プロツサー著／岡部朗一訳 異文化間コミュニ
ケーションの入門書。〔東海選書〕二八〇〇円

ASTRAEA

星の処女神 エリザベス女王

イエイツ著／西澤龍生・正木晃訳 帝権の構
造をイコノグラフィの手法で説明。三〇〇〇円

東京都新宿区新宿3-27-4東海ビル
電話(03)356-1541

日本女性史 全5巻 完結

「歴史のなかの女性」の実像に迫り、
女性史研究の新たな地平を切り拓く、
本格的な「女性史」、全5巻完結！

女性史総合研究会編

内容見本呈／各一八〇〇円

第5巻 現代

最終・回配本

大正デモクラシーに育まれた婦人
運動から、戦後「婦人解放運動」へ。
「女工哀史」の実態を分析し、婦人運
動・婦人解放思想を多面的に解明。

◇別構成◇
第1巻 原始・古代
第2巻 中世
第3巻 近世
第4巻 近代

東京大学出版会

113文京区本郷 ☎03-811-8814 総目録呈

良寛全集

口絵写真六
点

東郷豊治編著

A5判総布装二冊セット箱入豪華本
上六四〇頁 下六一八頁 定価九、五〇〇円

著者三十数年にわたる収集と研究の結晶に、鈴木虎雄、堀
口大学両先生が朱筆を加えられた最高の「良寛全集」。

東郷豊治著 新修

良寛

A5判総布装箱入愛蔵本
定価三、八〇〇円

読売文学賞受賞の創元選書版「良寛」に、その後の研究成果
も収録したユニークな評伝。(本文三七八・口絵三二頁)

東京創元社

162 東京新宿新小川町

西洋学事始

樺山紘一著 二八〇〇円



日本に紹介されなかつた、ヨーロッパ固有の文化が
はぐくんだ学問がある。古き時代に、そしてヨーロ
ッパ特有の知的雰囲気が発した学問がそれである。
それらの学の起源にまでさかのぼり、もう一つの西
洋学のありようをさぐる。

日本評論社

東京都新宿区須賀町14

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印